「先生は、いつも、待っておりましたと申されます。あの一言で、何もかも、とかされます」

平成二十四年九月例会記録（第二十一信を輪読）

「お待ちしておりました」

【発題・座談】心光寺住職　宮岳文隆（みやおかぶんりゅう）（釈文龍）

（二〇一二年九月二十六日実施）

■闇の中の一条の光

今朝、掲示板の法語を張り替えて庭を掃いておりましたら、ちょうどAさんが軽トラックで前を通られました。車を止めて車の中から掲示板の法語をじーっと読まれていました。やがて車を降りて私の所へ歩いて来られて、「いい言葉やなあ」と言われました。「今日は稲刈だから出席できんけど、心はここにあるよ」と。そして、また掲示板の前に戻ってしばらく見ておられました。

その掲示板の法語は、今日輪読する第二十一信の中から取り上げています。

唯、私を待っておって下さった仏様が
信じられたということだけが
私の生かされてゆく道だった

（『直筆書信集』上巻二四六頁・樹心社刊『うまれてよかったです

か』二四三頁）

これがその法語です。

第二十一信には題がつけられていません。大石先生は書信にはたいてい題をつけられるのですが、第二十一信にはつけられていません。そこで、僭越ですが私なりに「お待ちしておりました」という題をつけさせていただくことにします。大石先生はUさんに初めて対面された時、「お待ちしておりました」という言葉をかけられました。そのことを先生は、また第二十一信で再確認しておられるのです。

第八信の終りのところで一寸書かせて貰いました。「三月初旬のご法座に、東京から初めてお参り下さった婦人の方がおられます。聞法したいからと、職をかえ、居を広島に移されました。三月中旬の事です。生きることができなくなったところに一条の光を見出されたのでしょう」。

（『直筆書信集』上巻二三三～二三四頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二二八～二二九頁）

ここにUさんのことを、「生きることができなくなったところに一条の光を見出されたのでしょう」と書いておられます。これは大石先生が初めて藤解（とうげ）先生に出遇われた時、先生自身がそう感じられたのです。

この間あるお同行さんからお手紙をいただきました。この方は大石先生のお話しをずっと聞法してこられた方です。しかし先生が亡くなられてからは、どこの聞法会にも行っておられないそうです。「十年間大石先生の法座に通い続けたことが、今はまるで夢にようにあります」そう書いておられました。

【※これを聞かれた会場のBさんが「わかりますね、それ」と発言された】

ああBさんもそう思われるのですね。私はこの方に次のような返事を書きました。

「今はどこの聞法会にも出席しておられないのですね。あの十年間が夢のように思われるとのこと。お気持ちはよくわかります。〇〇さんと同じようなお気持ちでおられる方は多いと思います」

今Bさんも同じお気持ちだとおっしゃいました。おそらくそう感じておられる方は、外にも多いのではないかと思います。私はどうだろうかと振り返ってみました。

「私も時おり未明に目覚めた時、川向こうの国道二一〇号線を走る大型トラックのライトが木立の間から垣間見え

る時、未明の国道二号線を、大型トラックの列に挟まれるようにして、広島へ広島へと通い続けた日々のことがふつと胸を過ります。しかし今改めてその感懐を吟味してみると、これは通常抱く懐かしさとはやはり違うような感じがします。思うにそれは、生涯の師大石法夫先生へと直結している思い出だからでしょう。人生の道を見失ってさ迷っていた私が、暗闇を照らす一条の光とも言うべき師に出遇い、職も擲って広島へと馳せ参じた日々。あの日々は私にとって、どうしても過ぎ去りゆく時間の中の出来事とは思えません」

そうなんですね。やはり単なる思い出とは違うのです。「生きることができなくなったところに一条の光を見出された」と大石先生は書いておられます。私も大石先生に出遇つた時同じ感じがしました。私はその時五十歳になっていました。しかし未だ生きる道を見出せず、「このまま一生終わっていくのかな」と思いつつ過ごしていました。大石先生に出遇ったのはそういう時でした。その時の感じは、まさに「一条の光」という感じでした。生きる道がわからず、周りは真っ暗闇で、手探りで歩いている。そんな中に差しこんできた光です。一条ですから幽かなのです。家内が茶の間で大石先生の法話をテープレコーダーで聞いていました。その声が廊下を伝ってぼそぼそと聞こえてきました。勿論内容は聞き取れません。その声の響きを、別室で本を読みながら、聞くともなしに聞いていました。私は、その時は大石先生の名前も知りません。しかし、どういうわけか、「もしかしたらこの声の主は、私が命を懸けても出遇いたいと思っている先生かも知れないな」そういう思いがひょいと起こったのです。

そういうことがきっかけとなって始まった広島通いでした。しかし、「あの日々は私にとって、どうしても過ぎ去りゆく時間の中の出来事とは思えない」のは、そのためだけではありません。

「これから何度も反復され、年とともに増々根源へと沈潜し、人生の終焉を迎えるとき、極に達するようにさえ思われます」

忘れたり思い出したりしながら反復し、私の根源に向って沈潜していって、いつか命終わる時に、その経験が私の全体となる。あの広島通いは、私において、大げさに言えば、そういう出来事だったような気がするのです。つまり、自分に遇うための道を辿らせてもらったということです。

それで手紙にはこう続けました。

「大石先生は単なる人ではなかったということでしょう。大石法夫という人に出遇わせてもらったというよりも、自分の根源へと辿る道に出遇わせてもらったと言った方がよいのかも知れません。その道と先生の存在とが、何か重なっているというような感じです」

「過ぎ去りゆく時間の中の出来事とは思えない」ほんとうの理由は、実はここにあると思います。先ほど大石先生に出遇ったいきさつを述べましたが、それだけなら個人的なことです。そういう個人的な所に「過ぎ去りゆく時間の中の出来事とは思えない」理由があるのではないのでしょう。大事なことは、そういうことを通して、自分の根源へと辿る道に出遇わせてもらった。それが理由だと思っています。自分に出遇うための道ということになれば、単なる思い出で済ますことはできなくなります。皆さん方も同じではないでしょうか。要は、大石先生の下へ聞法に通われたことを、自分においてどのような出来事として受け止めるかということです。外の出来事としてのみ受け止めれば、「今は夢のように思われる」ということになるでしょう。外の出来事なら、『御文』に「一生すぎやすし」、あるいは「まぼろしのごとくなる一期なり」（真宗大谷派『真宗聖典』八四二頁）と述べられているように、どんなことも通り過ぎていきます。たとえ、お釈迦さまや親鸞聖人に会ったとしても、そういうことになっていくでしょう。

この方に手紙を書かせていただいたことによって、大石先生に出遇わせていただいたことの意味を、あらためて考える機会をいただいて有り難かったです。

■「お待ちしておりました」

大石先生は藤解先生に出遇われた時、どう生きていったらいいかわからなかったところに、確信は持てないながらも、「もしかしたら」という予感のようなものを感じられました。それを「一条の光」と表現されました。それをUさんの上に重ねて見ておられるのです。

法林寺では毎月二回、三、四、五日と十八、十九、二十日に二泊三日の法座が行われていました。Uさんは、平成元年三月三、四、五日の法座に初めてお参りされました。人に裏切られ、その時に起きたご自身の心の怖さに教職を辞し、両親にも行き先を告げずに東京へ出られたのです。この世を去ろう、終止符を打ちたいとまで思っておられたのです。そして東京から、学生時代の友人のお母さんへ手紙を書かれました。そのお母さんが、大石先生のお話を聞いておられた方でした。その方が心配されて、大石先生にその手紙を渡されて、「私の代わりに返事を書いてあげてくださいませんか」と頼まれたのです。手紙は四通あったそうです。大石先生は、「私も人生を拒否した人間です」

と返事されました。「どういう意味なのですか?」とUさんから手紙が届きました。こうして二度、三度手紙のやり取りがあった後、Uさんは初めて広島の法座に東京から足を運ばれたのです。大石先生はUさんにはまだ会ったことはありません。でも法話を始められた時、多くの聴衆の中から、すぐにUさんだと分りました。そして法話が終わると側に行かれて、「Uさん、お待ちしておりました」と声をかけられたのです。Uさんは、その後すぐに東京の生活を捨てて、何のあてもないのに体当たりで広島の駅へ降り立たれたのです。

私はUさんに会った時、「お待ちしておりました」という世界を頂いていてよかったと思いました。最初の時は、お互いのことを知りません。唯、私を待っておって下さった仏様が信じられたということだけが、私の生かされてゆく道だったから、そう申し上げたのです。

(『直筆書信集』上巻二四六頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四三頁)

こう先生は書いておられます。また、別の箇所にはこう書いておられます。

Uさんが申されます。「先生は、いつも、待っておりましたと申されます。あの一言で、何もかも、とかされます」

(『直筆書信集』上巻二四四頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四〇頁)

大石先生は初めてUさんに出遇われた時、「お待ちしておりました」と声をかけられたのです。Uさんはその言葉の出所に、暗闇の中に差し込んでくる一条の光を感じられて、東京から裸一貫で広島へ来られたのです。大石先生も、実はその三年前、六十四歳の時、Kさんとのご縁によって、法蔵菩薩の「お待ちしておりました」の声に出遇っておられるのです。ですからこの書信は、大石先生が出遇われたものがいったい何だったのかを書いておられる大事な書信だと思います。一言で言えば大石先生は、「お待ちしておりました」の心・世界に出遇われたのです。Uさんもその心・世界に出遇われたのです。我々もその心・世界に出遇いたいのです。ですからUさんは何に救われたかといえば、「お待ちしておりました」この一言に出遇って救われたと言ってよいのでしょう。

■待つということについて

「待つ」(板書)。私どもがいつも使っている言葉です。いつも使う言葉ほど、その意味を別の言葉で正確に言い換えようとすると、難しいものです。そういう時辞書で調べると、その言

葉について、新たな了解を得られることが多いものです。それで『新明解国語辞典』(三省堂)で調べてみました。これは小さい辞書ですがなかなかいい辞書です。「待つ」については、「何かがそこに来る(実現する)ものと予期して、それまで時間を過ごす」と書いてありました。成るほどと思いました。「何か」とは、今の場合は「人」ですね。あの人はきっとここに来る。まだ来ていないが、きっと来る。そのことを信じて、「今か今か」「まだ来ないか、まだ来ないか」と一日千秋の思いで思い続けながら時間を過ごすということです。「あの人」とは誰のことかといえば、私ども一人一人のことです。私ども一人一人の存在を、一日千秋の思いで思い続けながら、時間を過ごし続けておられる方がおられるということです。しかもその時間は半端な時間ではありません。曠劫(こうごう)という時間、無始以来という時間です。要するに、人間の思いがおよばないようなはるかな時間です。その間、我々はずっと待ち続けられていたのです。

そういうものに出遇ったら、私どもはいったいどういう気持ちになるでしょうか。Uさんはそういうものに出遇われたのです。

私はUさんには会ったことはありません。でも感覚のいい方だということは感じます。感覚がいいというのは、苦しんでいるということでもあります。苦しんでいるから、その苦しみに対して感じるものが多いわけです。「お待ちしておりました」は、単に人が人を待っている声ではありません。法蔵菩薩が私の存在を待っておられる声です。大石先生もその声に出遇われたのです。Uさんも大石先生を通してその声に出遇われたから、「先生は、いつも、待っておりましたと申されます。あの一言で、何もかも、とかされます」と言われたのです。

今は、私はUさんを迎える時、「お待ちしておりました」と、申し上げることができたのです。「人に会う時、念仏を忘れて会うたら悉く失敗しますよ」のお師匠様の教えが、信じられるようにしていただいたからです。

お参りの方に、時に「お待ちしておりました」と申しあげます。これを私が言うたら、大うそになります。そういうことは言えるものではありません。ある年の元日「開けましておめでとうございます」この一言を言いたくない為に一日中、外をうろつき回った私です。その逃げ回った私につき添いたもうて、私を常に待っていて下さった仏様の方が、会いたいと願うて下さった。

人様に向って「お待ちしておりました」と申しながら、仏様からの私に対されての願い、お心をきかせて頂いているのです。

Uさんが申されます。「先生は、いつも、待っておりましたと申されます。あの一言で、何もかも、とかされます」

「お待ちしておりました」も仏様のご回向です。お話しさせて頂くのも、ご回向です。各地に同道しますのも私の力ではありません。仏様のご回向を私が頂いて、仏様から私が救って頂いているのです。させて頂きながら、仏が私を救う下さる「行」をして下さっているのです。そのままが、ご本願より回向された「信」の内容なのです。そういう味わいなのです。

（『直筆書信集』上巻二四三～二四四頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二三九～二四〇頁）

読むほどに凄い文章だと思います。

ここもそうですけど、先生はUさんとの出遇いを語られる時、必ず迷われてきたご自身の半生のことを話されます。つまり「お待ちしておりました」は、どういう私を待っておってくださる声なのかということです。前の書信にもそういう箇所がありました。

「私の代りに返事を書いてあげて下さいませんか」

「私も人生を拒否した人間です」と返事にかきました。

「どういう意味なのですか?」と又、お便り頂きました。

お師匠様から厳しいお育てを頂かなかったら、この世から落伍したところにきこえる本願のお呼び声に気づくことはあり得ません。このお声は人間の声ではないのです。十七願、即ち諸仏称名の願より出でたり。

「今、あの年でわしと同じ待遇をうけとったら、どこまでおちるか分らんぞ」公けの面前で申されたことも諸仏の声だったのです。その時は勿論分りません。何とか助かろうと、しがみついた手がはずれた時、さしこんで来た光は諸仏を通して私に注がれた願力のお念仏だったのです。

（『直筆書信集』上巻一七四頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』一六二～一六三頁）

すなわち、「お待ちしておりました」はどういう私を待っておられる声かというと、「この世から落伍した」私を待っておられる声なのです。誰も待ってくれる人などいない私を待っていてくださるのです。立派な私を待っておられる声ではないのです。誰も相手にしない。人が相手にしないばかりでなくて、自分も相手にしない。自分なんか生まれない方がよかったと自嘲気味に思っている。そのことを大石先生は、「私も人生を拒否した人間です」と書いておられるのです。そういう私をずっと待ち続けておられた声です。この声に出遇われたのです。大石先生が出遇われた根源は、これだったと思います。

■思いはたじろぐ

皆さん方の感話を有り難く聞かせていただました。Cさんは、「今も何もわかっていない。けれども、前はそう感ずると焦ってじたばたしていた。今は生活の中で落ち着いてきた。その一方で、これでいいんだろうか、やっぱり違うのではなかろうかとか、いろいろ思う」とおっしゃっておられました。でもそっちの方に振れだすと、またじたばたが始まると思います。

先日ある同行さんからお電話をいただきました。その方は、教えを喜びながら求めておられる方です。しかし、現在置かれている人間関係の状況が非常に厳しいということもあって、教えられる内容が自分の業の核心部分に触れてくると、怖くなると言われます。核心に触れなければだめだということは頭ではわかっている。でも逃げたくなると。

私はその方から電話をいただいた後、善導大師の『二河譬』の文を思い出していました。行者が絶体絶命の局面に立たされた時、「自念言（自ら念言すらく）」と書かれているところと「自思念（自ら思念すらく）」と書かれているところです。自念言と自思念は、字は一字しか違いません。しかしその内容は質的に大きな違いがあります。資料をお配りしているので見てください。

まず「自ら念言すらく」の方ですが、どう念言したかというと、自分が今置かれている危機的な状況について、次のように念言したのです。

死を怖れて直ちに走りて西に向かうに、忽然としてこの大河を見て、すなわち自ら念言すらく、「この河、南北辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きわめてこれ狭小なり。二つの岸、あい去ること近しといえども、何に由ってか行くべき。今日定んで死せんこと疑わず。正しく到り回らんと欲すれば、群賊悪獣漸漸に来り逼む。正しく南北に避り走らんと欲すれば、悪獣毒虫競い来りて我に向かう。正しく西に向かいて道を尋ねて去かんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河に堕せんことを」時に当たりて惶怖すること、また言うべからず。

（真宗大谷派『真宗聖典』二一九頁）

先ほどのお電話の方は、今こういう心境だと思うのです。これを一言で言うと、「たじろぐ」という心境でしょう。自分が今置かれている危機的な状況をまざまざと知らされて、足が一歩も動かず、立ちすくむのです。

その方がいみじくも言われました。「頭が空回りする。縛られているような感じがする」と。自念言の内容は思いで、思いは必ずたじろいで、空回りしていきます。そして自縄自縛に陥っていくのです。

■落伍した身を待っている声

では、「自ら思念すらく」の方はどうでしょうか。

すなわち自ら思念すらく、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道有り。必ず度すべし」と。

（真宗大谷派『真宗聖典』二一九頁～二二〇頁）

置かれている状況は全く変わりません。にもかかわらず、こちらの場合は、「我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん」となっています。「我寧く」ということですから、心が安らかだということですね。置かれている状況は全く変わらないのに、なぜその違いが出てくるのか。違いは、自念言の世界は「思い」であるのに対して、自思念の世界は「身」の世界だという点です。身には理屈がない。置かれている状況はどこにも救いはないけれども、救いのないままに安らかなのです。

今日繰り返し出てきた「お待ちしておりました」は、何を待っている声かというと、そういうどこにも救いがない身を待っている声なのです。大石先生は「この世から落伍したところにきこえる本願のお呼び声」と書いておられますが、身は最終的にはこの世の諸々の評価から落伍していきます。そういう身を待っておられる声なのです。

それに対して、「思い」は、この世の評価の中を生きています。「ああなりたい」という自分なりの理想があります。自分なりの価値観を持っています。そして「こうあらねばならない」と自分にも要求しています。ところが自分の身は、その価値観からはたいてい落伍していきます。例えば「念仏したら湧き上がるような歓喜が起こるべきだ」と思っていても、いつもそういう歓喜が起こるわけではありません。身とはそういうものでしょう。親鸞聖人も、「あるときはさもとおもう。あるときはかなふまじとおもうなり」（『定本親鸞聖人全集』第二巻一〇〇頁）と書いておられます。念仏して歓喜を感じる時もあるが、反対に砂をかむような虚しさを感じる時もある。そうすると、価値観を主体にすると、「こんな自分ではいけない、もっと喜びを感じたり、燃え上がるような求道心に生きる自分になりたい」と思うわけです。

『歎異抄』第九章に出てくる唯円の悩みはそれだったのです。その悩みに対して親鸞聖人は、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」と応えておられます。これはちょっと読むと、「お前もそうか、私も前はそうだった」と、親鸞聖人が唯円のところまで降りて言われた言葉のように読めます。けれどもそうではありません。「私はずっとそうで、今もそうで、これからもそうあり続ける」と言われているのだと思い

ます。「ありつる」というのは、単なる過去形ではなくて、過去から現在にかけての進行形をあらわす言葉です。さらに、未来もそこに身を据えるという覚悟がこめられている言葉だと思います。親鸞聖人は、ずっとその覚悟に生きておられるのではないでしょうか。それが「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」というお言葉の底に流れているものだと思います。つまり、親鸞聖人のつねの居り場所が述べられている大事なお言葉だと思います。

唯円はそのお言葉を聞かれた時、ほんとうに驚かれたと思います。唯円にはそんな覚悟など毛頭なかったからです。それどころか、そのようなわが身が許せず、何とかしたかったわけですから。ところが親鸞聖人は、「私はずっとそこに居るよ、これからもそこに身を据えて決して逃げないよ」と言われたのです。その言葉を聞いた時、唯円は今までの価値観が完全に破られたと思います。つまり、親鸞聖人が自分のところまで降りてくださったというよりも、親鸞聖人のお言葉によって、自分の方が親鸞聖人よりも高い所に居ることが照らし出されたのです。唯円には、そういう自分の姿がはっきりと見えたのではないでしょうか。

それに続けて親鸞聖人は何と言われたかというと、

よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定（いちじょう）とおもいたまうべきなり。（真宗大谷派『真宗聖典』六二九頁）

と、こう言われました。

「天におどり地におどるほどによろこぶべき」というのは自分の価値観です。しかし身はそうなりません。これが自分の身の事実です。では駄目なのかというと、「よろこばぬにて、いよいよ往生は一定（いちじょう）」だと。つまり「よろこぶべきことをよろこばないので往生は一定（いちじょう）だ」と、こう親鸞聖人はおっしゃるのです。

（C）ちょっと待ってください。よろこぶべきことをよろこばないので往生は一定（いちじょう）？

（宮岳）そう。不思議な論理でしょう。よく読むと『二河譬（にがひ）』も同じ論理なのです。自思念（じしねん）の内容をみてください。「一種として死を勉（まぬか）れざれば、我寧（われやす）くこの道を尋ねて前（さき）に向こうて去（ゆ）かん」と、こうなっているでしょう。「一種として死を勉（まぬか）れないけれども」なら分りますが、「一種として死を勉（まぬか）れないので」となっています。これが親鸞聖人や善導大師の論理なのです。ですから「よろこばないけれども念仏があるから大丈夫だよ」という言い方をよく聞きますが、それはどこかごまかしがあるということになります。

それがごまかしだということは、この二つ後の書信第二十三信にも出てきます。

ある時の法話で、私には自力しかありません。どうにもなりません。お念仏しかありませんと話しました。あとでて来られたお師匠様が申されました。「あそこで大石さんがごまかしたぞ」お念仏をも、自力は逃げ道に使うのです。（『直筆書信集』上巻二七六～二七七頁）

ここのところですね。よろこべない、どこにも道がないというのが身の事実ですが、それを念仏でごまかしていくのです。

（C）よろこべないということに対して、念仏もうせばいいということではなくて、「前に向こうて去かん。すでにこの道有り」ということが、親鸞聖人の教えなんですね。

（宮岳）そうですね、よろこべない身、それを何とかするのが念仏ではなくて、よろこべない身、そういう身を呼び出しているのが念仏なのです。よろこべない身というのは、自分の価値観からすると絶対に認めることができません。ところが、そういう身を待っている声があったのです。それが念仏なのです。親鸞聖人は、その声に出遇われたのです。大石先生が出遇われたものも、これだったのです。

大石先生は藤解先生に出遇われたとき、「自分も助かるかもしれない」という一条の光を感じられて、一切を捨てて藤解先生の弟子になられました。この時先生は二十五歳でした。何事に対しても手を抜かずに真摯に生きられる先生ですから、それ以降どれほど一生懸命に求められたことでしょう。しかし何十年たっても容易に道は開けず、ついに理想の自分から落伍してしまわれたのです。その落伍した身に、その身をずっと待ち続けておられる声が聞こえてきたのです。その時は、先生はもう六十四歳になっておられました。入門から三十九年後のことです。

その声は、思い通りになる自分を待っておられる声ではなかったのです。「念仏もうしそうらえども踊躍歓喜のこころおろそか」な自分、そういう自分を待っておられたのです。それが法蔵菩薩です。法蔵菩薩はどこにおられるかというと、そういう身のところにおられるのです。自分の価値観からいえば、すべてバツでしかない自分、そこで法蔵菩薩に出遇うのです。

ですから「喜べないけれども念仏があるから大丈夫だ」という言い方を聞くことがありますが、念仏によってそういう身から逸れていこうとする場合があります。大石先生も、『あそこで大石さんがごまかしたぞ』お念仏をも、自力は逃げ道に使うのです」こう書いておられるでしょう。自力というのは価値追求で生きている世界ですから、行きづまれば、念仏を使ってでも、自分の価値を回復していこうとします。使えるものは何でも使っていこうとします。念仏や本願も自分の支えのために使おうとします。でも、結局それはうまくいかないと思います。なぜかといえば、思うようにならない身が、自分に着いて離れ

ないからです。

大石先生も長年そういう求め方をして逡巡してこられたのです。しかし、Kさんを殴るという出来事によって、始めて知らされたのは、自分の価値観から落伍した自己でした。「拝む気持ちで預からせて下さい」そう言ってKさんを預かられたのですが、その拝む手でKさんを殴られたのです。

その時は、私は教える立場でありました。人を教え得るという教育者の立場に立っておりました。救うて貰わねばならぬのは私でなくて彼だったのです。口では、食事をすすめ、入浴も先にすすめ、仕事をともにしても心は常に自分が上におって、教えてあげ得る立場におりました。ここに気づかされて、私は彼の前にぴたりと手をつかされました。形ではありません。自分の業の前に手をつかされました。業と一つになったという方が適切かもわかりません。

（『直筆書信集』上巻四十一頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四頁。※傍点は宮岳が付けたものです）

初期の頃の書信に、先生はこのように書いておられます。この気づきは、「全く晴天の霹靂（へきれき）であった」と先生はよくおっしゃっておられました。こう気づかされた自己は、自分が追求してきた価値観からは全く漏れた自己です。ところが、法蔵菩薩はそういう自己を待っておられたのです。

■身の決意

（C）う～ん、やっぱり本当の自己に気づくということの救いなんですね。

（宮岳）そうですね。でも本当というと、また何か立派な自己を想定してしまいがちです。そうではなくて、実は何ともならない身のことです。生老病死の身、老いれば認知症にもなるかもしれない身、やがて必ず死んでいかなければならない身のことです。我々はそういう身は見たくないのです。けれどもその身こそが我々の大地なのです。我々を迎え入れてくれる大地なのです。そこに帰る時、ふるさとに帰ったような安らかさがあると言われるのです。それで善導大師は「我寧（われやす）くこの道を尋ねて前（さき）に向こうて去（ゆ）かん」と書いておられるのです。「こうあるべきだ」という世界はしんどい世界ですが、身の世界は、私どもが本当に帰ることのできる安らかな大地なのです。

また、「我寧（われやす）くこの道を尋ねて前（さき）に向こうて去（ゆ）かん」これはひとつの決意の表明でしょう。「自念言（じねんごん）」の場合は決意がなくて、思いだけがぐるぐる空回りしているのですが、「自思念（じしねん）」には決意があるのです。決意といっても、私どもが考えているような個人的な決意ではありません。法蔵菩薩の決意です。具体的に言えば身の決意です。

（C）身の決意とはどういうことですか。

（宮岳）身というものは個人のものではありません。ですから身の決意も個人が行う決意ではありません。普通決意といったら、個人が行うものです。ところが個人の行う決意には個人差があります。そこには必ず優劣が生まれます。しかし身の決意の場合は平等です。意志強固な人も、意志薄弱な人も、共に宿業の身を生きているという点において平等です。その宿業の身の中に、平等に流れている決意です。それが涌出してきたのです。その決意は、どんな個人の行う決意と比べても、比較にならないほど優れている。そう善導大師は述べておられます。

善導大師は、個人が行う決意のことを「各発無上心」、それに対して身の決意のことを「共発金剛志」と表しておられます。そして「各発無上心」については「各 無上の心を発せども 生死 甚だ厭いがたく 仏法また欣いがたし」（真宗大谷派『真宗聖典』一四六頁）と述べておられます。まさに唯円がぶつかられた「念仏もうしそうらえども、踊躍歓喜のこころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」（真宗大谷派『真宗聖典』六二九頁）という壁です。必ずこのような壁にぶつかると言われるのです。これが個人の決意の行き着く所です。

それに対して「共発金剛志」については「共に金剛の志を発して 横に四流を超断す」（真宗大谷派『真宗聖典』一四六頁）と述べておられます。「金剛の志」とは、何ものにも妨げられない求道心という意味を表しています。それが身の決意です。特別意志強固な人だけが持っている求道心ではなく、誰もがその身の中に平等に持っている求道心です。それのみが、「四流」と呼ばれる生死の荒波に揉まれながらも、決してそれから身を逸らさず、「私は私でよかった」と、その生死の身を生きていくことができるというのです。それがエリートの求道心とは比較にならないほど広大でしなやかである。そのことをあらわすために「金剛の志」と述べておられます。

■本願の声を目の前で証明してくれる人

（D）話を元に戻してすみませんが、Uさんのことが何か気になるのですが。

（宮岳）そうですね。大石先生にとって、Uさんの存在は大きかったと思います。私も今そのことについて話そうと思っていたところです。

入苑当初、お師匠様が申されました。

「大石さん、この世に一人でものう、あんたによって救われて、この世に人間として生まれた甲斐がありましたという人が出たら、あんたは僧侶になった甲斐があったと思ってもよいで。そういう人が一人でもでなかった

ら、あんたは僧侶になった甲斐はないよ」

入苑当初です。今にして思えば、念仏往生の願に救われた方が「若し生まれずんば正覚を取らじ」のお心を私に注いで下さったお言葉でした。そういう味わいから申しますと、私がUさんにかけた言葉は、はるかな以前から、仏様から願われた願が、私を通して働いているのではないでしょうか。

（『直筆書信集』上巻二四八～二四九頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四四頁）

皆さん方も、それに類する言葉を聞かれたことがあるかもしれません。私は平成十四年十月、本山で住職任命式を受けました。その時の講習の中で、同じようなことを言われました。でもこの言葉は、受け取る側としては、少し気をつけなければいけない言葉だと思います。そういうふうに言われると、住職の任にある間に誰かを助けなければいけないかなと思うわけですが、もしそう思い始めたとしたら、その時から堕落が始まると思います。

「大石さん、この世に一人でものう、あんたによって救われて…」と藤解先生は言われたのですが、私はこのお言葉を次のように読みたいと思います。すなわち、この「よって」は、「縁って」ということです。「縁として」ということです。「あんたを縁として、仏様に救われて」ということです。こう読むと、無理なくいただくことができると思います。「そういうひとが一人でもでたら、あんたは僧侶になった甲斐があったと思ってもよいで。そういう人が一人でもでなかったら、あんたは僧侶になった甲斐はないよ」。大石先生にとってUさんはそういう人だったのです。先生が救ったのではないのです。

大石先生は、Kさんとの縁によって、落伍したところに聞こえてくる法蔵菩薩の「お待ちしておりました」の声を聞かれました。それから三年半後に、Uさんに出遇われて「お待ちしておりました」と声をかけられたのです。そのUさんは、大石先生にとって、ご自分の出遇われた法蔵菩薩の声を、具体的に証明してくれた人だったのです。行きづまって死のうとまで思われた人が、自分を縁として、自分の出遇った法蔵菩薩の本願に同じく出遇って救われたのです。そういうかたちでUさんが、目の前で、自分の出遇った法蔵菩薩の本願の生きた働きを証明してくれたのです。これは嬉しいでしょう。最高の喜びではないかと思います。

そのUさんのお手紙です。

「なにか、この世には、とてつもなく、広く広く、深く深く、そして尊いものがあるような気がします」

そのように、仏様のご本願が感じられるのでしょうか。

「そして、その教えは遠くにあるものではなくて、私が

考えていたものより、はるかに具体的であるような感じがします」

（『直筆書信集』上巻二四七頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四二頁）

大石先生がUさんのこのような感じ方を、共感しながら受け取っておられる様子が伝わってきます。

そして第二十一信の最後を次のように結んでおられます。

大信寺さんからの帰りの車内での話です。

「こうして、車にのせて頂いていること。お話をきかせて頂いていること。そのままが有難いのですね」極めて具体的であるように感じられるのでしょう。

そのように受けてくださり、今迄の生き方を迷いと知らされ、光に向って進んで下さったら、私が嬉しいです。まだおめにかかったことのないUさんのご両親にお礼が申されます。そのお礼まで「唯念仏して」と申されるのですから、それまでもご恩です。

（『直筆書信集』上巻二四八頁・樹心社刊『うまれてよかったですか』二四五頁）

「まだおめにかかったことのないUさんのご両親にお礼が申されます」こう大石先生は書いておられます。大石先生のご師匠さんである藤解（とうげ）先生も、大石先生のお母さんに対して同じようなことを言われたのを思い出します。

「奥さん。よう、大石さんを産んでくれましたのう」お師匠様が母の前で畳に手をつかれました。母も畳に手をつきます。「法夫が大変お世話になります」あとはお念仏。

私は目の前のこの光景が、この世のこととは思えない気持ちでした。世間から申しましたら、私はお師匠様にとっては他人の子です。その他人の子である私のことを「よう産んでくれましたのう」と私の母に手をつかされる。

（『直筆書信集』上巻二〇七頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇一頁）

自分の出遇つた法蔵菩薩の本願の生きた働きを、目の前で証明してくれる人に出遇う。そのことが、これほどまでに嬉しいことだということがよく伝わってきます。

■自信教人信（じしんきょうにんしん）

親鸞聖人は、『教行信証』の中で善導大師の書かれた『往生礼讃（おうじょうらいさん）』の文を、次のように読み変えて引用しておられます。

自（みずか）ら信じ人を教えて信ぜしむ、難（かた）きが中に転（うた）た更（またかた）難し。

大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る、と。

（真宗大谷派『真宗聖典』二四七頁　※傍線は宮岳がつけたもの）

傍線をつけた「弘く」は、原文では「伝えて」となっています。「大悲**伝**普化」です。それを親鸞聖人はあえて「大悲**弘**普化」と読み変えられたのです。「大悲**伝**普化（大悲伝えて普く化す）」であれば主語は私になります。ところが「大悲**弘**普化（大悲弘く普く化す）」と読み変えると、主語は私ではなくて大悲になります。一字違えただけで主語が全く変わってきます。親鸞聖人は、敢えて一字変えることによって、私が大悲を伝えて人を教化するのではないということを確かめておられるのです。善導大師の文章を書き変えるということは大それたことではあります。しかし親鸞聖人は、充分そのことは自覚されながらも、大師の真意を表そうとされて、敢えて書き変えられたのでしょう。

大悲にほんとうに出遇ったら、その出遇った大悲が、出遇った人を縁として、人に伝わっていくということがある。それは大悲の働きだということです。決して出遇った人が伝えるのではない。それをUさんが目の前で証明してくれたのです。だから大石先生は「まだおめにかかったことのないUさんのご両親にお礼が申されます」と書いておられるのです。

■身の菩提心

（D）Uさんは、特別感覚が鋭い人ですね。

（宮岳）そうですね。私はUさんに会ったことはありませんが、確かに手紙や会話の言葉を通して、求める感覚のよさが伝わってきます。しかしここで言う感覚というのは、個人的な資質としての感覚のことをいうのではありません。実は誰の中にも流れている感覚のことです。それを「共発」の菩提心といいます。

「共発」の菩提心というのは、身の菩提心と言いかえてもいいかもしれません。三帰依文で「人身受け難し、いますでに受く」と唱えますが、この「人身」の中に流れている菩提心です。人身は、性別、人種、能力、性格、生まれた国や時代の違いに関わりなく、どんな人にも平等のものです。平等に生老病死の身であり、平等に宿業の身であり、平等に自分の思い通りにはならない、行きづまりの身です。法蔵菩薩はその人身を待っておられるのです。その人身は、誰もすでに持っているものであり、これから努力して獲得や到達を目指していかなければならないものではありません。もともとそういう人身を生きているわけですから、そこに帰ればいいのです。

『二河譬』の「自思念」で、「一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん」とありました。あれは身に帰った世界なのでしょう。身は理屈がなく、解決がないままに安らかなのです。

私の家にはクマラジーバという名前の猫がいます。通称クマと呼んでいます。クマは数年前に鉄道事故に遭って片足を失いました。でも片足がなくなったわが身をかこったりはしません。「どうしてこんなことになってしまったのか」「あの時あんな所に行くんじゃなかった」自念言の世界だと、そういうふうにいろいろな思いが湧いて行きづまっていきます。でもクマは足がない身を黙って生きています。そういうクマを見ていると、「一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん」と決意して歩み出す自思念の世界とは、こういう世界なのかと教えられます。「この道」といっても、別に向こう岸に行ける道があるわけではないのです。では何が道かといったら、「この身をそのままに生きていこう」という決意が道でしょう。また、そう決意したら、「すでにこの道あり」で、自分一人ではなくて、親鸞聖人も法然上人も、また私どもの先祖達も、学問のあるなしにかかわらず、多くの無名の先人たちが、私どもに先立ってその道を歩いていかれたことに気づく。そう善導大師は述べておられます。

自念言の課題は、どうやったら目の前の二河を渡って向こう岸に行き着けるかということです。その方法がどうしても見つからずに行きづまっているのです。しかし本当の課題は、向こう岸に行き着くことではないのです。行く手を阻んでいる二河に帰ることなのです。行く手を阻んでいた二河こそが、私の帰るところだったと気づく。それが自思念の世界です。その時、その二河の身を待っていてくださる二尊[註]の声に出遇うのです。

■死に方を問わない

（C）私は死がすごく気になっています。死ぬということを考えると、すごく不安です。以前師事していた先生が末期癌で亡くなっていかれる時の文章を読みました。「もうどうしようもなく痛い」と書いておられました。そういうのを読むと、私もそうなるのではないかとすごく不安になります。

（宮岳）私どもの身は、水火二河の真っただ中にある身ですから、どういう死に方をするかわかりません。「痛い痛い」と言って死んでいかなければならないかもしれないし、あるいは認知症になって死んでいかなければならないかもしれません。

（C）私は、それではやっぱり助からないと思うんです。

註二河の真っ只中から、「ここであなたを待っている。安心して帰って来い」と行者に呼びかける阿弥陀仏（法蔵菩薩）の「招喚の声」と、行者の背後から、「私も法蔵菩薩の呼ぶ声に従って二河に帰ったのだ。あなたもその声に従って二河に帰って行きなさい」と勧める釈迦や先達の「発遣の声」。この「招喚」と「発遣」の二つの声を、二尊の声という。

（宮岳）そこでたじろぐのですね。唯円もそうだったのです。ところが、唯円がそのことを親鸞聖人に相談したら、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり」と応えておられます。つまり「私は死ぬ時に苦しむかもしれない、あるいは認知症になって死ぬかもしれない。そういう不安に今も慄いています。でもその中で『そういうお前を待っている』という法蔵菩薩の声を聞かせてもらっています」とおっしゃるのです。

（宮岳）『安心決定鈔』に「四種往生の事」という一段があります。人間の死に方に四通りある。第一は「正念往生」といって、念仏もうしながら心安らかに亡くなっていく。第二は「狂乱往生」といって、苦しみ悶えながら亡くなっていく。第三は「無記往生」といって、今で言えば認知症になったまま亡くなっていく。第四は「意念往生」といって、口に念仏は称えないが、正しい信心に住して亡くなっていく。このような違いはあっても、「四人ながら、帰命の心おこりなば、みな往生しけるにてあるべし」（真宗大谷派『真宗聖典』九五九頁）と述べられています。要するに、平生の時に、聞法して本願に出遇っているかどうかが一番大事である。死に方については、それぞれの業によってどんな死に方だってあり得る。しかし、それによって往生できるかどうかが左右されることはないと書かれています。

先ほどCさんは、師事されていた先生が「痛い痛い」と言って亡くなっていかれたと言われましたね。

（C）ええ、凄く痛がって亡くなっていかれたそうです。

（宮岳）禅宗のある御老師が大きな声で「痛い痛い」と言って亡くなっていかれたそうです。そしたら周りの人が、あの御老師は悟っていなかったのではないかと言われたそうです。でも悟っておられたから、大きな声で「痛い痛い」と言って亡くなっていかれたのではないでしょうか。

（C）ああなるほどね。

（宮岳）今でも「あの人は大往生だった」という言い方をよく聞くでしょう。大往生があるということは、小往生があり、また不慮の死があるということです。そして大往生と言われるような死に方を望むわけです。しかし真宗の教えの広いところは、こうあるべきだという価値観からは自由なことです。こうあるべきだと思ったところに法蔵菩薩が居られるわけではなのです。法蔵菩薩が待っておられるのは、あるべき自分にはなかなかなれない身のところです。身というのは、業によってどんな生き様もさらし出します。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」（真宗大谷派『真宗聖典』六三四頁）と親鸞聖人はおっしゃっておられます。だから死に方も、業縁によっていろいろです。事故死の場合もあれば、認知症のまま死ぬこともあ

れば、自死の場合もある。どういう死に方であろうと、業縁によるわけです。法蔵菩薩は、どういう死に方であろうとも、その業縁の身と運命を共にされるのです。

（C）私もある程度そこに腹を据えるしかないとは思っていますが、やっぱり「ちょっと待って」という気持ちがあります。

（宮岳）死に対する恐れや不安が起こるのは自然なことです。それを別に拒まないのです。死ぬのが怖くないことが別に信心を得た証拠ではありません。死ぬのは怖いというのが普通じゃないでしょうか。怖くてもいいのです。

（B）私はしばらく前に心臓の手術をしました。手術の前は怖かったのですが、ストレッチャーで運ばれる時、「もう抗ってもどうにもならない。お手上げのまま死んでいくしかない」という思いが起こりました。そしたら何か心が落ち着きました。

（宮岳）ああそうでしたか。確か青木新門さんがそれと同じようなことを言っておられたと思います。あの方は死体の処理をする納棺夫の仕事をしておられました。沢山の方々の死体の処理をされたそうです。その内に気づかれたことがある。それは何かというと、人によって死に方はいろいろと違いがある。しかし死んだ直後の顔は、みな共通して安らかだと。死に至るまでの過程においては、じたばたした人もあれば、泰然として死んでいった人もある。しかしどんな死に方をしようと、死んだ直後の顔はみんな平等に安らかだと。そのことに気がつかれて光を感じたと語っておられました。それを青木新門さんは、人間は死に至るまではじたばたするが、もういよいよ息を引き取る間際になると、絶望してお任せの心境になる。だから安らかになるのだろうと話しておられたと思います。

真宗の教えに平生業成という言葉があります。臨終の死に方によって往生するかどうかが決まるという臨終業成に対して、臨終を待たずに、平生に信心を得て往生の生活を送ることを平生業成といいます。法蔵菩薩の本願の呼び声が胸の底に届いた時から、往生の生活は始まるのです。蓮如上人が『御文』の中で「これすなわち第十八の念仏往生の誓願のこころなり。かくのごとく決定してのうえには、ねても、さめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり」（真宗大谷派『真宗聖典』八三三頁）と言われている生活です。

しかし『無量寿経』の懐の深いところは、そういう第十八願の世界だけではなくて、第十九願や第二十願の自力の衆生も、阿弥陀仏によって「十方衆生」と呼ばれていることです。第十九願では、阿弥陀仏は、生きている間に平生業成の生活は送れなかった者に対しても、死ぬ間際には、沢山の人々を引き連れてお迎えに行くと誓われています。阿弥陀さんが引き連れて行かれる沢山の人々とは、実はその人が一生涯の内に出会った全ての人々のことでしょう。その全ての人々が、命終えようとしているその人を、阿弥陀さんといっしょに取り囲んで見護って

くださるのです。その時その人は、「ああこれが私の一生涯だったのか」と納得して死んでいくことができるのです。そういうことが、第十九願において誓われています。だから『無量寿経』によれば、誰も最期の最期において、平安に命終わっていくことはもう間違いないのです。

でも、できれば元気な時に平生業成の生活を送りたいでしょう。平生業成というのは、苦しんでもいいという世界です。苦しみたくはないけど、それが避けられないのであれば、それも拒まないという世界です。そういう世界をいただいているとだいぶ違ってくると思います。

■生まれてきた意味

（C）まあ今の時代、誰が認知症になっても仕方がない時代だとは思うけど、やはり自分がそうなるのは怖いですね。

（宮岳）私は今六十二歳ですが、最近物忘れがひどくなってきて認知症の前兆かなと思うことがあります。私のこの症状が進めば「あの人ももう終わりやな」と思われるでしょう。それが常識の世界です。常識の世界は他人事の関心で動いている世界です。『無量寿経』の第十八願に説かれている唯除の身というのは、そういうふうにみんなから捨てられていく身のことです。法蔵菩薩の本願は、第十八願において、そういう身を呼んでおられるのです。自分自身も常識で生きていますから、唯除の身の自分は、自分であっても捨てていくのです。でも法蔵菩薩は、そういう唯除の身を決して捨てず、身を一つにされて、待っていてくださるのです。法蔵菩薩だけです、唯除の身を待っていてくださるのは。

（C）でもそういうのだったら…う～ん、何だか生まれてきた意味がないような気がする。

（宮岳）生まれてきた意味と言うならば、そういう唯除の身に出遇うことではないでしょうか。そのことの為に生まれてきたのではないでしょうか。

（C）う～ん！

（宮岳）私どもは唯除の身をほんとうに受け入れている心・世界に出遇うために生まれてきたのでしょう。唯除の身のあなたをこそ待っているという心・世界、それは人に左右されません。それ以外の心は全部人に左右されます。唯除の身を受け入れる心・世界は誰の中にも、Cさんの中にも、ちゃんと流れているのです。

（C）それで思い出しましたが、三重県にS先生という方がおられます。以前大谷専修学院の先生をされていて、昨年と今年、日豊教区内の専修学院同窓生の研修会の講師として来られました。そのS先生と話をしていたら、「私はね、誰からも嫌われる。孫からも『くさ～い』と言われている」と何回も言われるのです。それで私が「そんなになったら寂しいですね」と言ったら、

「でも、自分だけは見捨てない」と言われました。

（宮岳）ああ、本当にそうですね。

（C）「自分だけは愛しいでしょう」と言われるのですね。私はそんな世界は寂しい、ちょっとかなわんなと思ったんです。みんなからは嫌われて、自分だけは愛しいと思うなんて、それはかなわんなと思ったんですよ。

（宮岳）そう思っていると、それが弱点になると思います。S先生には弱点はないですよ。嫌われたくないと思っている人は、嫌われることが弱点になります。S先生も嫌われて嬉しいわけではないでしょうが、嫌われても仕方がないというところに腹を据えておられるから、弱点になりません。むしろそこが帰り場所であり、法蔵菩薩の呼び声を聞かせていただく大事な場所になっていると思います。

Cさんは、嫌われたくない、認知症になって死にたくない、苦しんで死にたくないと思っているので、それが弱点になるのです。それが怯えであり、たじろぎなのです。自念言はそれだと思います。嫌うか嫌わないかは人様の領域であって、自分には主導権がありません。自分に主導権がないものに根拠を置こうとすると、揺らぐのは当然です。揺らがないものに出遇わなければなりません。揺らがないものとは何かといったら、S先生が言われたように、「世界中の人が見捨てても、自分は決して見捨てない」という心・世界です。

（E）藤解先生は、『私はあんたの友達じゃ』という人があらわれたら、『そう言ってくださるのは有難いが、あなたは私のほんとうの心を知らないからそう言ってくださるのです。そのあなたも、私の本当の心を知ったら逃げるよ』と言えるものを貰いなさい」と言われていたそうです。

（C）う～ん、私も前はそういう解放された世界を求めていたけど、私の場合いろいろな邪魔が入って、はっきりしないようになった。そういう私においても、やっぱりお念仏の行がひとつの要になるのでしょう。

（宮岳）そのお念仏というのが、藤解先生の言われているような世界です。みんな自分から逃げていくという場所は、怖くて、自分一人ではとてもそんな所に居ることはできません。でも法蔵菩薩がそこに居ってくださるのです。それが念仏です。念仏は呪文ではありません。自分は怖くて居ることができない自分自身の場所に、法蔵菩薩が先に落ちて、「お待ちしておりました」と手をついて待っていてくださるのです。そういう仏さまが感じられたら、怖がっていた自分も、始めてその場所に帰ることができるでしょう。それが念仏です。

（C）後生の一大事とかよく言われるでしょう。それが大事なことなんでしょう？

（宮岳）そういう自己に出遇うことが後生の一大事です。誰が捨てても自分だけは捨てない。そういう自己に出遇うというこ

とが後生の一大事です。

（C）でも、念仏の行を通さなくては後生の一大事には出遇えないのでしょう。

（宮岳）行なんかできない。

（C）え～！

（宮岳）親鸞聖人が出遇われたものはね、人間には行はできないということです。

（C）でも、念仏をいただくということが大事なんでしょう。

（宮岳）それは行じゃない。念仏は如来さんの行です。人間の行じゃない。

（C）でも、自分の身を通さないと救われないというじゃないですか。

（宮岳）それは行じゃないんです。

（C）じゃそれは何？

（宮岳）信です。

（C）ああ信、そうか、そうそう。信をいただかんと…ああそうか。

（宮岳）信というのは何かといったら、法蔵菩薩の「誰が捨てても私はお前を捨てない」という心・世界でしょう。最後はみんなが捨てていくのです。その自己に立つのが信です。それでは困るというのは信ではない。みんなに頼っているのです。みんなの評判に縋りついているのです。「誰が捨てても私はお前を決して捨てない」という法蔵菩薩の心・世界をしっかりといただいたら、S先生のように、人から捨てられることが弱点にならない。揺るがないものに立っているから。揺るがないものというのはこの身です。この身は、みんなから捨てられても、ここにこうして在るじゃないですか。

『二河譬』で言えば「一種として死を勉れず」という状況が、みんなから捨てられた唯除の身でしょう。世の価値観から捨てられ、みんなから捨てられ、自分もそんな自分は捨てていくのです。最後にこの身が取り残されているでしょう。その時、取り残されたこの身の心が噴き出るのです。「誰が捨ててもこの身を捨てられない」という魂が、私どもの深いところに流れているのです。それが涌出するのです。ですから本願というのは、この身を離れてどこかにあるのではない。Cさんの身の中にある身の魂です。Cさんの身の魂は、人々の評判などに左右されず、どんな評判も関係なしに、無条件にCさんを受け入れていくのです。この「無条件に」ということが一番大事な点です。

■「根拠なし」の自尊感情

過日、自死防止に関する講演（講師・東海大学教授、近藤卓氏）を聞く機会がありました。今日本では三万四千人位の人が自死で亡くなっています。その日本人に、今何が衰弱しているかというと、自尊感情だと話しておられました。

（C）はい自尊感情、そうですね。

（宮岳）その自尊感情にも二通りあるそうです。一つは社会的自尊感情、もう一つは基本的自尊感情。社会的自尊感情というのは、相対的な価値評価によって保たれている自尊感情です。例えば学校の成績が良いということで自信を持っている場合がそれです。しかしこれは風船がふくらんでいるようなもので、危うい。それに対して基本的自尊感情は、そういう社会的な評価に関係なく自分を尊いと感じる感覚で、これが育っているかどうかが非常に大事なポイントになると話しておられました。

その先生のお話で面白かったのは、社会的自尊感情と基本的自尊感情の有無の組み合わせについて、四つの場合に分けて話されたことです。

第一の場合は、社会的自尊感情も基本的自尊感情も、両方共に厚い場合。第二の場合は、社会的自尊感情は厚いが、基本的自尊感情は薄い場合。第三の場合は、社会的自尊感情は薄いが、基本的自尊感情は厚い場合。第四の場合は、社会的自尊感情も基本的自尊感情も、両方共に薄い場合です。講師は、「理想は第一の場合ですが、では最も危険なのはどの場合だと思いますか」と問われました。皆さんはどれだと思いますか。

（C）第四の場合でしょう。

（宮岳）そう思うでしょう。ところがそうじゃない、第二の場合だと言われました。なぜかというと、第四の場合は、社会的自尊感情も基本的自尊感情も、両方共に薄いけれども、まあともかくそういう中を今日まで生きてきたので、一応耐性はできている。ところが第二の場合は、例えば成績が良いとかで周りから評価されて、風船がふくらんだように自信を持っている。ところが、上の学校へ進学したら自分より成績の良い人がいっぱいいて、風船が破裂するみたいに自信がいっぺんに吹き飛んでしまう。残ったのは薄っぺらな基本的自尊感情しかなくて、今まで曲がりなりにも社会的な評価の中で自信を保ってきたので、それが無くなった時の耐性が全く育っておらず、精神的に非常に危険な状態になると話しておられました。

では、この基本的自尊感情とは何かといったら、その先生は面白いことを言われていたのです。「根拠なしに」無条件に自分は尊いと感じることだと言われたのですよ。これは面白いと思いました。根拠があると、その根拠が条件になってしまいます。ですからそれが壊れると、それによって保たれていた自尊感情も崩れていくのです。「根拠なしに」というのは、理屈抜きに、無条件に、何も取柄はなくても、自分は尊いと感じる感覚です。

私はこのお話を聞きながら、「根拠なしに」自分を尊いと感じる基本的自尊感情は、実はこの身の中に誰もが持っている感覚だと思いました。しかし、講演会の講師は教育者でしたから、教育者の観点から、基本的自尊感情をどう教育の中で育てていくかという方法について話を進められました。例えば、困難な

ことにいっしょに立ち向かっていく。そうするとそこに連帯感が生まれ、人との間の共感が育まれていく。そのような体験を一つ一つ積み重ねていくことによって、基本的自尊感情が少しずつ育まれ、厚みをもってくると話しておられました。

それはそれで大事なことだと思います。でも、親鸞聖人の教えてくださる道は、もっと根源的です。講師が大事だと強調されていた共感の体験は、確かに基本的自尊感情を育む上で大事なことでしょう。しかしそれでは、成育歴においてそういう体験を持ち得なかった人、それどころか機能不全の過酷な家庭環境に育った人はいったいどうなるのでしょうか。特に今日の日本の社会では、経済的格差が広がって、そういう家庭環境で育った子供たちが増えていると言われています。そういう子供たちはいったいどうなるのでしょうか。

法蔵菩薩の本願の世界では、そういう場合でも大丈夫だと教えてくれるのです。もともとこの身の中には、誰の中にも、理性より深いところに、「根拠なしに」自己の存在を尊いと感じる魂が流れている。またその魂に目覚めて生きてきた無数の先人たちの歴史もすでにある。だからその先人たちの呼びかけに呼び覚まされて、この身の中に流れている法蔵魂に立ち返って歩んでいけばいい。そう私どもに呼びかけてくださるのです。

そのことから言えば、先ほどの講演の中で、講師が最も危険だと指摘されていた類型、すなわち社会的自尊感情は厚いが、基本的自尊感情は薄いという場合でも、「大丈夫、心配しなくていい」ということになります。なぜかというと、自己に対する社会的評価が地に落ちて、社会的自尊感情の風船がはじけたとしても、そのことが、この身の中に流れている基本的自尊感情、すなわち法蔵魂が涌出（ゆうしゅつ）する大事な縁となるからです。

大石先生もUさんも、実は第二の類型を潜（くぐ）られたのです。すなわち、社会的自尊感情の風船がはじけて失意に沈んでいる、その渦中において、そのような身を呼んでおられる法蔵菩薩の声を聞かれたのです。

■海はどんな川も受け入れる

（宮岳） Cさんもね、自分はこういうことをしてきたからもっとみんなに評価されていいとか、そういう理屈をつけている間はふらふらすると思います。理屈抜きに自己を尊いと感じる魂、それが法蔵魂です。法蔵菩薩は誰が捨てても自己を決して捨てない。立派だから捨てないのではありません。立派だとか、立派でないとか、そういうことには関係なしに、Cさんの存在そのものを大事にして、決して捨てないのです。その魂は、Cさんの身についているものです。Cさんが今生活の中で落ち着きを取り戻しておられるのは、頭ではまだいろいろと理由を見つけようとしているかもしれませんが、身のレベルでは、法蔵魂に触れているからだと思います。

先ほど、「これではいけないのではないか」とかいろいろ言っておられたでしょう。そういうふうにぶれそうになっても、軸足は、法蔵魂に触れた身のところに置いておくことが大事だと思います。みんなから認められなくても、どういう死に方をしようとも、法蔵菩薩は、「あなたを待っているよ」という声をかけ続けてくださっています。ですから、どんなことになっても、その声をしっかりと聞いていくことが一番大事だと思います。

（C）でも、S先生の場合だと、お孫さんから臭いと言われるとか、私の場合だと、私のあり方が子どもの期待に沿えず、結果的に子どもを見捨てていくようなかたちになっているとか…そんなことを考えると、もう悲しいねえ、どう言ってみても。

（宮岳）ええ、自分の価値観からすれば悲しいかもしれませんね。そういう感情は起こります。でも悲しくても大丈夫な世界です。Cさんはそうなったら困ると思っているでしょう。それが弱点になっていると思います。S先生だって、臭いと言われれば悲しいでしょうが、そこが法蔵菩薩と出遇う大事な場所になっていると思います。だから揺らがないのです。

（E）私の場合も、自分の苦しかった時のことを振り返ると、やはり自分の心に足場を置いていたと思います。それはつくづくそう思います。

（C）今いろいろ気にかかっていることを考えないようにすれば、悲しいという気持ちは起こらなくなるのでしょうかね。でも、S先生でも悲しいという気持ちはあるのでしょう。

（宮岳）いや悲しい気持ちはあってもいいのです。また考えないようにするということでもありません。考えないようにしても、いろいろ考えてしまうものです。それが普通でしょう。自分の根拠をそこに置かなければいいのです。悲しかったり、考えても仕方のないことを考えたりすることは当然あります。法蔵菩薩は、そういうふうになかなか思い通りにはいかない私のところにこそ居られるのです。「そういうお前を待っておる」と呼びかけてくださるのです。

（E）自分の帰り場所があるということですかね。帰り場所があれば、どんなにふらふらしても、人から変な人と言われたり、嫌われたりしてもいいということですかね。

（C）帰り場所はあるけどねえ、周りを振り回しているのではないかと思うんです。

（宮岳）Cさんは、今までずっとそういうところで迷路に入り込んでこられたでしょう、何十年と。でも感話の中で、今は生活の中では落ち着きを感じていると言われました。その感覚を大事にされたらいいと思うんです。

だいぶ以前のことですが、大分組夏期講習会（おおいたそ）で佐野明弘先生が講師の時、質疑の時間にCさんが質問をされました。それに対して佐野先生が答えられた時の光景を、私は今も鮮明に思い起こすのです。Cさんはその時も、何か迷路に入り込んで途方

にくれているような質問をされました。それを聞き終わられた佐野先生が、こう言われました。「そうやって迷ったまま死んでいくんです」って。

（C）そう言われたねえ。

（宮岳）そしてこう続けられました。「それをそのまま受け入れている。それが海だ」と。

（C）ええ、そう言われました。でもそれだと、何のために生きているのか、何のために仏法聞いているのかわからなくなります。

（宮岳）佐野先生は、Cさんの生涯が見えたのでしょう。迷ったまま死んでいくという生涯が。それはCさんだけではありません。この私もそうです。また佐野先生自身も、自分のそういう生涯が見えたのでしょう。同時に、その迷いの生涯を、そのまま受け入れる海が見えたのだと思います。海はあらゆる川を平等に受け入れている。水のきれいな川や、迷わずに真っ直ぐ流れてきた川は受け入れるけれども、うろうろ迷い回って流れてきた川は受け入れないとか、そんなことはないでしょう。私も結局迷ったまま死んでいくんです。本願の海は、そんな私どもの生涯をそのまま受け入れてくださるのです。その世界を、私はあの時、一つの光景として見せていただいたような気がしました。聞かせていただいたような気がしました。忘れられない経験です。

（途中省略）

■暁烏敏（あけがらすはや）先生の転機

（F）価値観が逆転するということですかね。

（宮岳）いや、価値観が逆転するというよりも、価値の世界自体が崩れて、存在の世界が現れる、と言った方がよいと思います。

昔読んだ暁烏敏（あけがらすはや）先生の『更生の前後』に書かれていたことを思い出します。暁烏（あけがらす）先生は、若い時から仏教界で名前の知られた当代一流の布教師で、全国各地に沢山の信者がいました。ところが三十六歳の時、奥さんが病気で亡くなられて、奥さんの看病のために来てもらっていた看護師と、奥さんの死後、関係ができてしまいます。しかし結婚できない事情があり、間もなく別れます。それが世間に知られるところとなり、『中外日報』誌に書き立てられて、名声は一挙に地に落ちてしまいます。その時の苦しみを、『更生の前後』の中で次のように書いておられます。

一　愛妻に別れた悲しみにくらやみになったのに、これまで築き上げた自分の人格の破壊に等しいこの情慾の奴隷、私は昏乱（こんらん）しました。（中略）

一　隠遁、還俗（げんぞく）、自殺、海外移住、心は千々（ちぢ）に乱れた。

（中略）

一　（中略）私も海外に行く心が湧かぬでもなかったが、一人の母に引かれて果さなかった。自殺の思ひ、これも一人の母に引かれて果さなかった。すべての恥辱に忍び、すべての苦痛に堪へても、一人の母をすてるに忍びなかった。かくて私は逃避と滅亡との道を去りて、苦痛を苦む突進の一道に進むの外はなかった。かくて私に新しい世界と広い天地が開けました。（以下略）

（『暁烏敏全集』第二部第二巻十三～十五頁）

『中外日報』誌には「信界の強盗」とまで書き立てられ、その中で「隠遁、還俗、自殺、海外移住、心は千々に乱れ」たのです。しかし一人の母を残していずれも行うことはできず、現実を逃避するあらゆる道が絶たれます。まさに『二河譬』の「一種として死を勉れず」の状況です。そのどこにも逃げられない状況の中で、「恥さらしのまま、生き恥をさらしたままの自己に立って、再出発していく外ないじゃないか」という自己が生まれたのです。いわゆる社会的自尊感情の全てを失って、どん底に落ちたのです。その時、暁烏先生は次のような歌をつくっておられます。

「どん底に　沈みて見れば　のぼるべきみちの　一つのこれり」（前掲書七一頁）。

世間からは「あんなやつはいない」と言われる、その恥さらしのままを生きていこうというところに甦ったのです。社会的な評価は全て失われました。けれども身は残っています。「この身に帰って、この身のままを生きていこう」と、そこに立ったのです。価値の世界が崩れて、存在の世界に立ったのです。それが一番強いでしょう。存在の世界は人を選びません。どんな人にも平等です。価値が有ろうと、無かろうと、「根拠なしに」尊い。それが存在です。

■アホかて生きてるんや

安田理深先生が散歩中、街の小さな書店に立ち寄られたところ、書架に喜劇俳優の藤山寛美の『アホかて生きてるんや』という題名の本を見かけられたそうです。それを見られた先生が、「ほんとにこの言葉の通りなんや」と話しておられるのを読んだことがあります。非常に印象に残りました。

藤山寛美は波瀾万丈な生涯を送った人のようです。戦後を代表する有名な喜劇役者でしたが、型破りの金遣いの荒さで自己破産してしまいます。ようやく社会復帰しますが、今度は知人に騙されて巨額の負債をかかえてしまいます。ところが、「わてのアホはどうやら本物らしゅうおます」と言って恨み言一つ言

わなかったと言われています。ですから藤山寛美本人は、アホどころかスケールの大きな天才的喜劇俳優だったわけです。しかしそのことは別として、安田先生は「アホかて生きているんや」、この言葉自体に、強く訴えかけてくる真実性を感じられて、お話の中で取り上げられたのでしょう。

「アホかて生きているんや」何か人に誇れるような根拠があって生きているのではない。生きていること自体[註]が、賢いとか立派な業績をあげて、価値ある生き方をしているとか、そういうことよりもはるかに大きくて深いのです。

Uさんのお手紙の中に、「なにか、この世には、とてつもなく、広く広く、深く深く、そして尊いものがあるような気がします」と書かれていました。それは「遠くにあるものではなくて、私が考えていたものより、はるかに具体的であるような感じがします」と書かれていました。みんなから臭いと言われても、アホと言われても、世間から捨てられても、この身は生きている。そこに社会的な価値をはるかに超えた「とてつもなく、広く広く、深く深く、そして尊いものがある」のです。それが法蔵魂の感覚なのです。

註 この「生きていること自体」というのは、「死んだら終り」というような「死と区別された生」ではなくて、清沢満之（きよざわまんし）先生が「生のみがわれらにあらず。死もまたわれらなり。われらは生死を併有するものなり」といわれたような「生死を併有するところの生」を意味しているものだと思います。従って、この「生きていること自体」という言葉は、「生きていること自体死んでいくこと自体が」と置き換えることによって、より意味が本質的になるように思います。

（F）周りからけなされても、自分自身のところに帰ったら、そこから何かつかめるわけですね。

（宮岳）いや、つかめるというよりも、むしろ何もないところに立ったのです。「アホかて生きている」という、そのアホのところに立ったのです。

（F）はい、何もないところに、逆転したわけですね。そしてそういう状態になったことを、また社会は評価するようになったわけですね。

（宮岳）でも、そういうものにはもう揺るがないでしょう。当代一流の布教師という名声はもう破れて、風船がはじけたわけですから。その落ちたところに立った時、そのことがまた評価されてくることは当然あるでしょう。しかし、もうそこには一喜一憂しない。今までとは違う。

（F）全盲になりながらも、宗務総長までなられた。

（宮岳）そういうのは社会的評価で、それはすでに破れているから、またそれがついてきても振り回されないでしょう。またはじけるということを知っているから。

大石先生の姿を思い出します。大石先生は落ちたところで、

その自己を呼ぶ根源的な声に出遇われました。ところがその大石先生を慕って来られた同行さん達が、その大石先生を讃嘆される。でも先生は、誉められても落とされても、動きませんでした。皆さん方が先生を讃嘆するような感話をされるのを、大石先生はじっと聞いておられました。その後ろ姿を背後から見ていた家内が、後でこう言ったのを思い出します。「先生はみんなが誉めれば誉めるほど、ぐぐっと沈潜していくような感じがした」と。

これは恐らく、先ほどEさんが言っておられた藤解（とうげ）先生のお言葉、「『私はあんたの友達じゃ』という人があらわれたら、『そう言ってくださるのは有難いが、あなたは私のほんとうの心を知らないからそう言ってくださるのです。そのあなたも、私の本当の心を知ったら逃げるよ』と言えるものを貰いなさい」このお言葉に、大石先生は、誉められれば誉められるほど呼び返されておられたのではないでしょうか。

（以下省略）

（宮岳）だいぶ時間を超過してしまいました。今日は遅くまでどうも有難うございました。

（※座談中の発言者をアルファベット表記にしていますが、イニシアルではありません。但し、文中に出ているUさん、Kさん、S先生についてはイニシアルです）

※以上は二〇一二年九月二十六日に実施した「心光寺定例聞法会」の記録を加筆訂正したものです。